WASON
HQ
1:C4
J74

Sept. 1899
no. 496

明治三十二年九月二十五日

女學雜誌

第四百九拾六號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九十六號目次

◎社說
一葉女史を追懷す
浮華逸樂の弊風
續海舟餘波(九)

◎評論
時事評論
文部大臣に對する非難の聲
星亨
伊藤侯の八方美人

◎女學
職業と人情の關係(山形東根)
兒童研究に付て女學記者に一言す(久津見蕨村)

右答
盛んに外國人と結婚すべし(次郎)
女學生に對する批評
少女と對話(露草)
薄緣(有邪無邪)

◎雜錄
春花秋月(述懷小說)一、二(露生)
些事些言(無識庵主人)
罰を熱海のさまよひ日記(一)惡魔の子有美
惡魔の子が詞にならひて(瑞溪子)
六甲山の夏景と六甲山の朝景色と
岩屋の雨景(松山高吉大人)
湖上を渡り頻みし蜻蛉に寄す(岩野泡鳴)

◎隨感
紫文學○人事生物學○悟れる人たゞ迷あり○
兆脊教易占○理想男子、仲秋無月

◎時事
松本荻江女史送葬の辭(下田歌子)

◎片々、時報

◎要目

社告

◎本誌は每月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

● 女學雜誌定價表 ●

前金		
壹冊定價	拾錢	(內國無郵稅)
半年分定價	壹圓拾錢	
一年分定價	貳圓拾錢	

代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料		
一行(廿二字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金 送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年九月廿四日印刷
明治三十二年九月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

雜誌 舊幕府 廣告

「舊幕府」刊行の趣意

明治も既に卅九の星霜を重ね戊辰の少年も今や不惑の齡に達し鬢邊の霜寒きを感ず况んや當時幕閣の樞機に參せし人の如きは古稀の頹齡に至らざるなし今日もし舊幕府の遺聞零册を收拾するをなくんば今より三四年の間には元老は皆墓に入り辭ぬるに道なく問ふに法なく恨を百歲の下に抱く者あらん余も德川家の旗下に屬せし者なり轉た感慨の情に堪へず奮つて幕府特に幕末の史料纂集に從事せんと欲し木村芥舟翁に計る翁は此擧を嘉とし常に示教せられんと約す又勝伯榎本子大鳥君に計り更に亦栗本鋤雲向山黃村杉浦梅潭田邊蓮舟の諸老に計りしに諸君も皆此擧を助けんと諸せられたり唯如何にせん余が淺學微力なる十分に盡す能はざるの恐れあり希くは同感の諸君一臂の力を惜むとなかれ(每月發兌。一册十二錢。)

明治卅年四月 殘花 戶川安宅

「舊幕府」第參卷第六號目次

◉挿圖
○佐久間近江守と林昌之助君の肖像

◉史料
○荷蘭帆船スペルウエル號難破始末(長岡子寄送)
○咬𠺕秘記

◉史傳
○林氏日記○林忠崇氏傳

◉史談會記事
○長岡子談話

◉史筵
○御船の記、憤終論○史門雜爼

◉詞藻
○成島司直詩○江府年中行事詩

◉附錄書
○宋名臣言行錄

發行所 東京府北豐島郡巢鴨村二百四十五番地 舊幕府雜誌社
大賣捌 女學雜誌社

女學雜誌

第四百九拾六號

明治三十二年九月廿五日發兌

社説

一葉女史を追懷す

當代の文士彬々たり、中に就きて小説界尤とも秀拔せる才人を露伴紅葉の二君となす。二君の天分と技能とは、各自兩樣の特色を存し、互ひに拮抗して下らず、盛んなりと云ふべし。其中、露伴の勝る所は氣に存し、紅葉の長とする所は情にあるが如し。故に、露伴が多くの作を通して一貫せる趣構は、人間感激の致す所ろ、忽然として化して別人となるの理想に由らざるはなく。紅葉が片々たる短作より其稀なる長作に至る迄、終始巧妙の筆を役して非凡の苦心と精緻なる觀察とを寫し出す靈美なる文章は、大抵、目前身后の世の常の人々が、不斷に感じ幾度も經歷する人情の波瀾を敍述するをもて最とも多しとす。露伴は寧ろ奇を寫し、紅葉は常を寫す。露伴の作に於ては、愚者も尙ほ保藏すべき靈妙なる神識の俄然煥乎として光彩を發つの狀に觸感し、紅葉の作に於ては聖者も尙ほ消しがたき暗弱なる欠陷の明白に曝露せられ、英雄士君子の所詮常識以外に離るゝ能はざる所以に感悟す。露伴の文は突作に成り、紅葉の文は彫縷切瑳言ひがたきの經營あるに似たれど、其の苦心は固より一のみ。但だ彼は氣を以て勝り、此は情を以て主とするの故に、讀者或は別樣の觀を爲す歟。然れども、慘澹幾辛苦、抱負長養千萬壽の慨あるに至つては、二君互ひに同じ。明治の小説に於て二君を得、而して二君の未た意に驕らずして大いに進歩せんとするの養ひあるが如きに至ては、竊かに我文界の爲めに祝謝せざるを得ざる也。

悲しひ哉、二君の前途尙ほ多望なるを祝すると同もに、天才の挫折亦た續ぎがたく閨秀の長沒復たび反しがたきは、亡一

葉女史の夭折なる哉、女史が、其の秘密なる情の戰と闘ひ、其の長き貧苦と闘ひ、不屈慨然として遂に万丈の恨思を歌ひ出されたる迄の年月は、決して短かきにあらざりしが、世上其才を認ためて、文名一時に喧傳してよりは、忽然として勞苦の身を没するに至る迄、餘りに短日月なりき。然りと雖ども、吾人試みに其筆路をたどり、『うもれ木』『朧月夜』より、『大つもごり』『十三夜』に至る迄、凡そ四年間に讀書社會に獻ぜられし幾多の短篇小説を讀返せば、女史が一種特得の天分の亦今更に景慕せらるる哉。此の天分や、露伴紅葉の未だ決して所有せざる所、恐らくは其將來に於ても發揮するヿ能はざる所ならんか。女史が文界に生息せし年月は太はだ短かく、其の作せし所のものも皆な短かゝりしが、もし其の含畜して而して煥發せしめたる所のものに就て之を言はゞ、女史が作の短かきは長き意味を有し、殆んど他の文士が千語万言を以て述べ盡しがたき一種の秘密を、極めて容易に、至つて平易に叙述し去りき。之れ一に女史が特得の長所たるに由ると云へども、亦これ其の女性たるの故に關するヿ多し。乃はち是れ露伴紅葉が將來に於ても終に企及するヿ能はざる可き本領なり。

蓋し、一葉女史は、閨秀文士としての特得を存せしのみならず、小説家として優に一代に聞ゆるに足る長所を有したりき。女史が小説に就て、强ひて故意らしき假作の痕跡を求むれば、其の談話の本末を飾り、究極の結果を晦まし、時々、才思を弄して敢て讀者を玩ぞぶの嫌あるヿ是のみ。其他は、讀者仔細に讀み進んで、識らず、話中の人となり、女史が多恨多情の言語をもて世にありし哀れの事實を在のまゝに談話せらるゝを聞くの心地す、遂に戯作架空の小説を讀とは感ぜざるべし。是れ豈に作者として、秀拔せる伎倆多濃なる情熱を所有せしが爲めにあらずや。人情の機微を知り、之に濃かなる同情を寄す、たとひ才筆なしと云ふと雖ども尚ほ其の記述に非凡の力あるべきに、況して女史が苦心經營の筆路をもてす、仔細に情海のとゞろきを寫して、些々たる心中の波のひそめきをすら書き留めたり。斯の如き眞實の筆、斯の如き誠意の文は、露伴紅葉に於てすら稀に見るところとす。二君をもて一葉に比せんに、二君は才を頼んで小説を作するがごとく、一葉は泣いて小説らしき世の事實を懺悔述懷する

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に似たり。二君の小說に於ては、讀者、或は感激し、或は賛歎し、或は啞然として笑ふ、然も遂に惻々、彼をして泣かしむべき箇所に觸れんとは太はだ稀なるに、獨り一葉の小說に於て淚禁じがたき事の屢ばあるは何故ぞ。敢て、其の酷なるが故にあらず、亦た其の巧みなるが故にもあらず、但だ其の至眞至純、妙に人情の實際に合して、脈々なる心動の自から之と同化するの故にあらずや。之を以て、作家の巧妙とせば即はち巧妙なり。然れども、巧妙の二字寧ろ作爲を意味す。吾人は一葉女史が此の成効を以て尤とも多く其の情熱と至誠とに歸せんと欲する也。

而して、斯の如き情熱と至誠との斯の如き小說的事實に向かつて眞實に傾注せられたる由緣の一理由は、確かに其の女性なるの故にあらずんばあらず。一葉が小說中の女子は眞に女子なり、露伴紅葉が小說中の女子は寧ろ女らしき芝居のみ。もし劇場をもて喩へば、一葉が小說中の女子は、女性が女形を演ずるなり、露伴紅葉の作に於ては男役者の假りに裝ほふなり、巧みなりと雖ども尙ほ一物を欠く、楚々人を動かすべき細事些事に於て遂に女らしからず、たゞ話しの筋と、活動の働らきとに於て、巧みに女性らしく演ずるを見る也。

試ろみに、一葉が作に於て、戀愛に對し、妻の苦辛に對し、放埒に對し、多情に對し、犧牲に對し、母の眞情に對する等の女の心情を寫すを看よ。近くは、露伴紅葉、遠くは西鶴春水と雖ども、遂に能く斯る女性的情感の機微を道破したるものある乎。吾人の不文なる未曾て之を讀まざる也。其の濃やかにして心切なる、其の愼しみありて恥らふ、其のいた〳〵しくしていぢらしさ、若くは、一旦激する時、惡鬼の如く夜叉の如く、殆んど浮華なる男子の夢にも思はざる如き大膽激烈の覺悟を忽然として生ずるなど、大抵男子小說家の常に記さゞる所、記すも尙ほ其心眞に入りがたき所ろのもの、一葉に在ては、吾が經驗を語り、吾煩悶を語り、吾が懺悔を語るが如く、自然に平易に敍述し去れり。此れ豈に露伴紅葉の及ぶ所ならん、況んや其他をや。

吾人は固く信ず、男女なき一般の文士としても、一葉は、或る點に於て確かに露伴紅葉に凌駕すべき才分を有したりき。然し乍ら、其の由緣の多くは其女性たりし故に概畧し去りて、茲こに切に閨秀小說家の彼女の夭折と共に中絕せし不幸を嗟

嘆す。嗚呼、彼女が持せし斯の如き特得の長所は、たとひ露件あり紅葉ありと云ふと雖とも、而も之を償ふ能はじ。一葉落ちて秋寂寥、爾來未だ春光の來復を聞かず。女性の代言たり、女性の誇りたるものに於て、今倘ほ第二の一葉女史が萌ざすを見ざる、眞とに女界の恨事ならずや。惟ふに、天才の夭折するや、靈種散亂して幾多の苗を養ふ。察するに天下多少其人なきにあらず。庶幾くは大いに修養して、他日爛熳たる開花を見めせ。

浮華逸樂の弊風

◉無論、太平の世の中では無いが、不思議にも世間では太平と思つて居る。大平時代に在がちなる弊風が追々完備して、都は固より、田紳の住む各地方に至る迄、唯是れ、翩々たる浮華逸樂の流行のみである。

◉奢りの長じたことは近來實に驚ろくべき程である。會社員、銀行員、名士、政治家の匹ひは、何の基礎と何の必要とによつて今の如く奢るとかと太はだ不審に堪えぬ。彼等が現在の

習慣に於ては、殆んど之を莫る可らざる程に感じて居らしいが、抑そも何の頼む所ろ、何の安んずる所あつて斯計り生計を高めるのである乎。我輩なぞの眼中からは、寧ろ白痴かと思はれる程である。

◉抑そも收入が大いに殖えたのである乎と問へば、決して左樣でない。彼の奢るもの等は大低出入償はぬほどの生活を仕て居るのである。左らば、奢るとが譽れであるの乎と問へば、國家は外債を募り、大藏は財政困難を告げて居る時節に、名士政治家が自己の生活を高くして夫で賞められると云ふ筈は決してあるまい。左らば、何の爲に奢るのかと云ふと、付合の爲だと言ふ。附合で、双方困つて居る位ひならば、寧ろ止めたら好からふと言ふと、夫は出來ぬと言ふ。何故出來ぬと聞くと、つまりは見榮坊である。左なくば、自分で既に其の僻が附いて、なか／＼除き難いのである。必竟は、克己の出來ぬ慾に縛られて居るのである。

◉之はいつでも大平時代の例で、其の太平だと思つて居る時ほど危險極まる時代はないのであるが、兎に角、目前に亂が無い所ろから、太平と心得て、其の所謂ゆる太平の爲めに國

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

民皆な氣をゆるし、万事を圖鹵に、今日を懶惰に送つて、浮いた事、華やかな事ばかりを好む樣に成るのである。斯うなると、人の心も足も度胸も覺悟も皆な浮いて來る。浮くとは輕くなるので、個人々皆な輕くなつて遂に一國を輕ろくするので、一國の倒れるのは、即わち此の輕くなつた時である。

◉維新の大業は未だ少しも成就しない。南洲海舟が土臺を作り、甲東松菊が二三本の柱を建てた丈けで、まだ〳〵實際の進歩と見る可きものは毫も擧らぬのである。況んや、世界の運氣東方に集まり、大勢の機會眼前に切迫して來た今日に方つては、苟くも志士を以て任ずるものは、日夜創業の覺悟を以て事に臨まねば成らぬ。アキンドであらうが、政治家であらふが、宗敎家敎育家であらふが、皆な創業である。創業に必要なる苦辛、克己は無論として、苟且にも氣をゆるして奢に長ずるやうなケチな小さな抱負では斷じて相成らぬのである。

◉一躰、奢るだの、惰けるだのと云ふは、心の小さいから起るのである。大望あり、大氣あるものは、ソンナ事に身を持崩さふとしても崩せぬものである。苟くも氣慨あるものが、國として優勢の國が吾目前に突立ち、人として吾が及ばざる所の人物が卓然として吾前に突立ち居る間だ、之に競ひ、之に及ばんとをだにせずして、なまけるの、奢るのと云ふは、死んだと同じとである。其の氣合、膽力が活動せぬ以上は、死んだと同樣である。斯く思つて自から省みても尙ほ激勵するとが出來ぬときは、彌よ〳〵亡びたも同然である。

◉昔しから、興國の偉業を成し遂げたは、必らずしも金錢でない、兵力でもない。此等は無論緊要欠く可らざるものではあるが、其土臺となつて、之を起し之を活かしたものは、志士仁人の生ける元氣である。元氣一と度び亡ぶる時は、金の多き、兵力の強き、反つて國家の災を爲すのみで、些しも益に立たぬ。

◉今の時の困難は、財政にあり、軍備にありと云ふは、尙ほ淺薄の見解である。一家の事に當てゝ考へて見ても直きに分る。財政困難の時の困難は、錢の無いのにあらず、奮發の足りないのである。身をドン底に沈め、速に泥水をかぶり、極く々の下から盛反すとの決心だに起らば、今まで足らぬ足らぬと言つて歎息したものの丈でも、實は結構過ぎたのであると云

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ふとが分つて來る。軍備でもそうだ。兵の多きよりも、兵氣である。擧國皆兵の氣風さへ起らば、軍備を足すとは、必らず出來る。

◉凡そ元氣元氣と言ふものは、兎角、學術的でない。學術的のものは、大抵また元氣と云ふ一大勢力を忘却する。双方何れも誤まりである。然し、今日の通弊は、寧ろ元氣を忘れる方が多いのである。忘れる斗りでない、彌よ以て元氣を枯らす樣な事斗りをして居る。當代の秀才名士などと云われる族の仕事の遣り口は、皆な夫である。ワザ〱自分で元氣を殺すよふな順序にのみあせつて居る。元氣といへども、養なわねば枯れる。養へば、澎湃として天地だも倘ほ吞まんとする慨度を起す。然るに、今の名士はワザ〱殺すのである、自殺である。自殺の中、元氣の自殺ほど、哀しむべく、惜しむべきものは外に決してあるまい。

◉此の元氣の衰ろふる時、即はち浮華逸樂に迷ふの時である。而して、浮華逸樂に耽つて、いよ〱此の元氣を亡ぼすのである。斯る流行も、決して無益に心配斗りするには足りぬ。之を一轉して剛健朴實の風に化え、人心の機軸を一回しするとは、勉强さへすれば雜作なく出來ることである。

◉其の一法としては先輩、先覺が、大いに慾を削るが善いので、慾を削るとは、衣食住交際万事に斷乎として儉素の風を守張し、ケチ〱した吝嗇にあらずして、大有爲の氣象から、剛健なる風を發揮するが善い。食物が不味いとか、着物が無いとか、住居が狹いなどと云ふとを、考へにも浮べてはならぬ。交際なども、酒食遊樂の上で見榮を張るとを全廢し、知人の艱難に趨る義俠義捐の奮發を第一とするやうにせねば成らぬ。もし上に立ち、前に行く人が斯る風にすれば、後進は自然と其風になる。國風を變へるとは決して六かしいとではないのである。

◉之に就て誤解してはならぬのが、儉約と云ふとである。抱負なく、理想なき儉約は、甚だしく人の心を小さくするもので、段々保守的になる斗りである。其風が彌よ擴まれば、國勢は萎微として振わぬ。大躰に於て、國家の進歩に益の無い話である。吾輩は、斯る氣風の儉約を賞めるものでは決して無い。生計に奢り、交際に見榮を張るなど丶云ふケチな事をするナ、身の廻りは質素なるが剛健で宜しい、長生も出來る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

事も出來る自由でもある、ソンナくだらぬ我欲に束縛されず、常に活潑々の元氣を大いに養つて、大に爲す有ることを爲せト云ふの主意で、之が爲には一錢の金でも必要である。事業を成す熱心の人でなければ錢の價値は分らぬ。此の主意に於て儉約し貯畜し、以て大に使ひ、大に散らすことを爲せと云ふのである。保守的の儉約論ほど元氣を枯らすものは少ない、夫が流行すればまた國家の元氣を枯らすのである。之は吾輩の甚しく嫌惡する所である。

續海舟餘波（九）

◎今日に至つて南洲先生を論ずるものすら、未だ能く其の政治的技能を認めざる人が多いのである。大勢の跡は、大綱に緣つて穿鑿すべく、大綱の跡は年月を經ねば明かには分らぬものである。南洲先生の如く、大勢に乘じて大綱を提げ、世界的經綸の上よりして國家百年の大事を決せられた大政治の痕跡は、無論、年月を經ねば凡俗に識認せられぬ筈である。然るに、先生逝いてより既に廿二年、最早や七年一轉の三回期を過すほどであるに、尙以て先生の本領を解得せざるものがある程なれば、僅かに去年世より沒せられた海舟先生に對して、其の政治的技能を認むる人の未だ多くないことは、勿論、奇しむに足りぬことである。

◎然し、海舟先生の大本領は政治で、殆んど政治的天才と言つても然るべき程のお方であつたと思はれる。固より他に種々の長所もあり、生れ乍ら非凡の天分を有し、決して何々的の人物などとして一方に局定すべき小さい人格では無つたが、其一生の經歷と、止むを得ざる責任と、時代の必要とよりして、遂に尤とも多く先生の政治的技能を發達せしめ、東洋第一流の政治家とならしめたのである。

◎夫故、先生の苦學と多趣味とを以てして、七十餘年間、巨多の人物に交遇し、皆な各別種々の利益を吸收し、其道に於て夫々の先輩として尊重せられたる人物は多くあつた樣であるが、「政治」と云ふ局面に於ては、乃公第一人と云ふ恐ろしい抱負を懷いて居られた。平生口を極めて贊歎せられた小楠南洲の二先輩に對しても、此點に於ては毫も遜讓せられなかつたのである。

◉東洋に於て、海舟先生が注目して居られた政治家は、獨り李鴻章で、國內の元勳先生方には毫も重きを置れなかつた。國會の騷ぎなどがあると、『三百人の雜兵を相手にしてイクサが出來るか』と言つて居られた。總理にしたいと云ふ樣な話しがあると、『己が總理になれば、二三年寢て居るよ』と言はれて居た。其の所言所許、いつも破格で、殆んど捕捉しがたい調子であつたから、大抵のものは、ホラとしか聞かなかつたであろうが、仔細に考へて二三年待つて見ると、着々其の言はれる所と附合するとが多くあるので、誰も遂にはトント頭を下げるやうになるのであつた。

◉日清戰爭の后、支那から償金が這入ると云ふので、早や其使ひ道に囂々たる建策があり、庶人皆な醉へるが如くであつた時、獨り先生は甚だしく心痛し、病中ながら關係あつい諸家の執事を呼んで、深く注意せられた。『日本の財政は、之からが困難だ。此の後は非常の財政困難になるから、今から早く用心をせねば成らぬ』と言はれた。島田三郎君などが、「今にして初めて勝先生の偉人たるとを知る」と言つて大いに感難せられたは、即はち此折の事を追懷せられてゐ事である。

◉夫故、支那と云ふものに對しての意見も、甚はだしく輿論と違つて居た。先生は、支那崇拜だと言つて、笑つた人もあつた程である。日清戰爭の頃から、『御覽よ、之からは支那問題だ、支那が二十世紀の呼物になるから』と言はれたが、まだ其頃は、何人も其樣な事を言ふ人もなく、たゞチヤン〳〵と言つて輕蔑ばかり仕て居た頃であつた。

◉支那に對する意見の違ふと同じに、李鴻章に對しての意見は丸で違つて居た。海舟先生と李鴻章との間には、面白い逸話があるので、維新前、某と云ふ書の好く出來る男を擇んで海舟先生の手から李鴻章の探偵にやられたとがあつた。李鴻章に妾があるから、其近所に居て探れと云ふとであつた相ナ。夫で、某が其の通りにして段々、妾の所へも出入する樣になると、或る時、李鴻章が遊びに來た、妾の言ふには「日本からコウ〳〵云ふものが來て居るから、合つて御覽なさらんか」と言つた。李鴻章は、會わふと云ふとで、會つて暫らく顏を見て居た相ナが、夫から二階に上げて、人を遠ざけて、李鴻章の言ふのには、「お前は、勝安房守の探偵で來たのであらう、白狀すれば善いが、左樣でなければ縛して殺して仕

舞ふ」と云ふヿであつた。某は大膽な人物で、在の儘に言つて仕舞つた。スルト「夫なら、私の家に來て居れ」と云ふヿで、家へ行くと、三千人も食客が居る、皆な用いられぬものが居るので、何事にでも上手なものが夫々居る。玆に居て、夫から學校に通はして貰つて居た相なが、「日本へ何を報告しても善いから、其前に一寸と見せろと」云ふヿで夫れから見せると、「よく出來たが、之は斯々、あゝ〳〵と言つて、一層細かに話して聞かせた相な。維新後三四年まで、そふして居たが、「モウ、勝サンも入り用でなからふから、歸れ」と云ふヿで、其時、皇帝の前で書をかゝせ、澤山に褒美を貰はせ、勝先生にも厚い立派な紙に自筆で書いたものをよこし、大きな印に功績を書いて彫つたものを二つ、五六百圓づゝもする位のものだソウナが、夫も添えて、某を送り返した。

◉夫から、海舟先生と李鴻章との間には一種の脈絡が通じて、斷えず書面の往來があつた樣に見へた。支那から日本に來るものが、李鴻章に暇乞にゆき、日本で誰に會ふべき乎と聞くと、是非とも先生を尋ねろと云ふヿであつて、公使にせよ、誰にせよ、支那から來た知名の開化人は、皆な第一に氷川を尋ねた。

◉李鴻章が、馬關迄談判に來た頃、伊藤大使の權幕は恐ろしいもので、李鴻章の馬鹿らしさも亦た非常のヿであつたが、此際、海舟先生の評は、『あれが自からやつて來るからには、腹に一物持つて來たに相違ない、うつかり油斷はならぬ』と言われたが、誰も耳を傾むけるものが無つた中に、あゝ云ふ次第となつた。

◉夫で、近頃の事で言つて見ても、日清戰爭に對し、遼東還附に對し、戰後の經營に對し、支那問題に對し、李鴻章に對し、皆な輿論と違つた卓然たる一種奇異なる意見を持つて居られた。然るに、其の跡に付いて考ふれば、着々的中して、眞に驚ろくべき先見となつて居る。ソコデ、世人の所云ゆる政治的技倆なるものは如何なるヿを言ふのである乎。今の人の稱して政治家と云ふ其政治家の技倆は、ホンノ些末の手段の事を言ふので、實は政治的事務家の長所を擧るのである。左すれば、斯樣な標準から評して、南洲先生海舟先生の如きを、遂に政治家でないと言ふのは寧ろ適當である。政治家でない方が、反つて二先生の譽れであり亦た本領である。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

時事評論

◎文部大臣に對する非難の聲が大分高くなつて來た。或る教育雜誌は、之から遠慮なく大攻擊をするなど、ワザ〳〵斷はつたものもある。然し、其等が非難の理由とする所を聞くと、眞とにハヤ憫然至極の見識で、かゝる小規摸を以て國家の大政を議する時は、朝から夜まで喃べり續けても未だ不平の種は盡きぬヿであらふと思はれる。甚はだしきは、高等師範學校とかを改築せぬと云ふヿまでが、最大不平の一つである相ナが、殆んど滑稽としか思はれぬ。

◎凡そ、他を攻擊すると云ふヿは、中々六かしいもので、苟しくも責任と實際とを知るものは、容易には爲ぬヿである。盲滅方に過激な評論を試ろみて、口角泡を飛ばすよふなヿを言ふ所を聞くと、如何にも痛快な樣であるが、左らば若し其人をして代らしめたらばドウであるかと考へて見ると、直きに分る。先づ第一其人が現在爲て居る手際を見れば直きに分るのである。一家の事、小さき一事業の事でさへ甘まく行かぬものが、堂々たる大政を料理するヿに斗り俄かに明哲となるべき筈が無いのである。然し、事實、自分が夫丈けの事を仕て居らぬから他を評論する權利、利益が無いと云ふのでは決して無い。評論と云ふものは中々益に立つもので、たとひ其説は用ゆるに足らぬとしても、大きに參考になる、當局者は之を用ひて油斷大敵の一刺激としても宜しいのであるが、扨て其評論が要緊に中つて居るか居らぬ乎の試驗石は、評者自身が責任と實際とを知ると知らぬとによつて直きに分るのである。身を其責任の地に置た心持で、實際上の工夫から出た評論でなくては、大抵は急所を外れて居るものである。

◎然し、文部當局者の人に於ても、必らず其丈けの覺悟はある筈で、ナゼ斯る餘計の不平が起つたかと言へば、前に餘計の希望を持たせたからであると覺らねば成らぬ。文部大臣も始めは默々主義で、實際の事實で推て行く樣な風に見へ、心あるものをして竊かに眞實の希望を置かしめたヿであるに、中ごろ何處から小才子流の建策を聞かれたとか、ヤレ八年計

謂だの何だのと言つて、出來もせぬうちから切りに吹聴させ、空中の樓閣で御馳走をして、人を烟にまかせる樣な事を爲られた。此時、名大臣の樣に感服した連中が、今に於て切りに不平を言ふ丈の事で、初め感服したのも間違つて居る、今不平を言ふものも間違つて居る、ツマリ其連中相應のおしやべりに過ないのであるが、文部當局の人に於てはハタと思ひ當られる事がある筈である。其の思ひ當られる事に就て他山の石となさば、囂々たるヲシヤベリも決して無益にはならぬのである。

◎願ふらくは、文部大臣たらんものは、たゞ學校の事に斗り眼を着けぬように爲て貰ひたい。國家の文政は決して學校に於てのみ行わるゝものではない。況んや、學校の建築とか増設とか云ふ如き事に、大して苦勞をするにも足らぬ事である。かゝる末節の事に局促とすればこそ、大切の文政が擧らぬので、もし其の尤とも大切なる所が擧つて來ねば、コケをどしの才子風で少々末節の所に好結果を奏したればとて、大躰に於ては取るにも足らぬ事である。一國の大政は總べて大躰に於て成功せねば成らぬ、末節の所は少々失策する位が面白いのである。

◎國土山川が一大教場で、國民は皆な生徒である。文部大臣とは、文部の方面から大政を考へるもので、大藏大臣が經濟の方面から大政を考へ海陸軍大臣が軍備の方面から大政を考へるのと同じ事ではあるが、實は品格理想に於て更に一段進んだ程でなければならぬ。經濟と軍備も一つの事務であるが、文部の仕事は、人品を作るものである。言わば、國家の大政の基礎を造るものである。夫故、總理大臣と、宮内大臣と、文部大臣との三つが鼎立して初めて理想的の大政が擧るほどのものである。然るに、文部大臣と云へば、たゞ學校の世話方で、所云ゆる教師連の頭取であるかの如くに思つたり思われたりして居る。文政の擧らぬは無論の事である。

◎然し、今の文部大臣などは、比較的名大臣で、兎に角、從來のに較べれば、祝しても善いのである。但だ才子風にかぶれず、末節に競わず、赫々たる功名を願わず、斷乎たる一大決心を腹肚の裏に藏めて士氣激勵の道を取らるゝなれば、存外の公益があると思はれる。之は今の大臣に相應して而して今の大臣に望んで然べき事であると信ずる。其他の事は、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

當分、何も出來ないでも構はぬ。そふ不平ばかり言つて、誰が代つて出來るか。其の不平の言ひ方の詰らぬヿから推して考へても、アノ先生方にやつて貰ひたいとも思はれぬのである。

◎星亨 の名は、何處へ行つても、大問題となつて居る。此丈け悪評があつて、夫れで存外悪人と思はれぬと云ふは、一の秘義である。悪人と思はれぬのみならず、一種の快感を與へると云ふは、何故である乎。たとひ未だ曾て彼を見ざるものと雖ども、其の確信と、誠意とを疑ふヿが出來ぬ。斯迄の勇斷、斯迄の壓倒は、固く信ずる所と、純一無雜の決意とが無ければ容易には出來ぬヿで、之が乃はち當代に於て尤とも多く欠けて居る所ろのものであるから、何人も彼に於て快感を覺えるのである。洪水の後、大風あり、大風の後、快晴あり。今に於ては是非一度星流の人物を要するので、結局邦家に貢献する所の益は、必らずしも春畝先生一流の法制的寄附には劣らぬヿであらふ。

◎伊藤侯の八方美人 と云はれたは、侯の方から八方に愛嬌を振播かれるヿを形容したのであるが、近頃は反つて八方

から侯の方に振播て來る樣になられた。別種新意義の八方美人となられたので、恐らく從來今ほど伊藤さんの評判の好いヿはあるまい。之は一盛一衰の習ひで、殊に我國の如き浮氣な評判の多い所ろに於ては、常に免れぬヿである。曩に大隈伯が總理大臣となられる時迄の評判と云ふものは、素張らしいものであつたが、今の伊藤侯は丁度其頃の大隈伯とよく似て居る。大隈伯は多年陰險の人の樣に誤解されて反政府黨の大悪人の樣に言はれた。其長き逆境が一轉してあの頃の好評判となり、遂に總理大臣となられたが、之は少し早や過ぎたので、隨つて逆境の後の順境時代が短かゝつた。伊藤侯も亦た隨分誤解された方で、觀兵式の御大將だと迄で言はれた。此の誤解が忽然釋けた爲めに今の樣に好評判と爲られたのであるが、誤解の釋ける時は、雪の溶けるやうなもので、太はだ迅速で、春風春水一時に來る好景況であるから、フイト亦た大得意になりたがるものである。誤解も過れば、賞める事も過る、逆境順境共もに長が過ぎるものと覺悟して、自から抑損したらば、些しくは過まちも減るのであるが、之は中々出來にくいものである。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

女社會學職業と人情の關係

山形東根

凡そ人類の性情に影響を及ぼすものは、國土、歴史、社交、家庭、職業等、千種万類擧げて數ふべからず、中に就て今職業に關する一事を考究せんとす。

一國を概括して其職業別を見、一村を概括して又之を見來れば、農工商其他の職業の趨勢を知ることを得べし、而して半農半商、半商半工、半農半工等より純粹の農工商等に分ちて、之を地方別にし、以て其地方の人情風俗を察すれば、如何なる職業は之を營むものゝ心理に、如何なる影響を如何なる程度まで及ぼすかの攷究問題に遭遇すべし今日の學術は之に對して未だ確乎不抜の原則あることを明言し居らざるか如し、而かも職務の何なるによりて其心性に及ぼす影響あることは、決して疑ふべからず、故に國民の心理を究めんとするものは、必ずや其國民の職業に着目し、其盛衰に注意する所あるを要す。

社會の發達を見るに、始めは遊獵牧畜にして、次は農、次は商工と移轉し來れるは、明白の事實なり、而して最も進歩せる社會は農工商の平均に發達せる所を指す、其一方に偏する國民は、未だ進歩せざるもの、寧ろ不完全なるものと云ふべく、國民心理上に於ても、頗る欠くる所あるものと斷じて可なり。

分業の經濟界進歩に利あることは、經濟學上爭ふべからざることなり、各人物品を製すること巧熟にして良品を生産し、時間を消費すること少なく、又其給料上より幾多の便利を有するは今更詳説を要せずして明かなり、(例之製靴六十四、時計百、針十八等の分業あり)

然れども、之を身躰上と精神上とに及ぼす影響如何を見れば往々恐るべきものあるは疑ふべからず、一部の專門に傾き局部に偏するものは、全躰の躰育に不平均を來し天職の發達を遂げ難きは、衛生學者、生理學者の夙に痛嘆措かさる所なり、啻に身躰のみにあらず、性情の上に於ても其の之れあるを見る、されば分業の發達は經濟界に宜ろしとして道德上に惡しきや、吾人は之を惡しとするも分業の利を抑制すること能は

ず、唯全躰に於て其弊害を少量にせんことを計るべきのみ。」
農工商中、分業の廣く行はるゝ所は、工業界と商業界なり、農業に至つては其行るゝ所甚だ少なく、寧ろ行はれざるものと云ふも可なり、之れ先つ第一に着眼すべき點なりとす。今一二の例を以て之を說かん、

屠殺業――觸るゝ者は獸畜なり、其肉を裂き其血を流すを以て業とす、昔は之を穢多と稱して非人の部に入れぬ、其性自ら殘忍酷薄たらざるを得んや、

獵師――鹿を逐ふ獵師は山を見ず、唯た之を獲んことを欲するは彼れの職務なり、之を獲るは之を殺すなり、其性如何んぞ温和柔弱なることを得べき、

監獄の看守――守るものは刑事犯罪者なり、其逃走を防き、其擧動を看守するは彼れの職務なり、故に唯人を抑制看守するの念のみ發達せざらんとするも豈に得べけんや、

探偵――其探らんとする所は、罪人の踪跡なり、彼の目は鷹の如く鋭く、少しく疑ひあれば百方より推測して止まず、刑事探偵の心は疑心暗鬼なり而して冷酷なり、

博徒――一攫千金の不正の業を爲す、法律嚴重となるや彼は些少の音響にも戰栗し警吏の來るなきやを恐る一方に大膽にして他方に競々たり、傷持つ足の痛むが如き風あり、

裁判所の受付――裁判所に至るもの何れも一僻を有する者、之を受付くるもの亦温和に取扱ふことをせず、傲慢にして無禮、殆んど人間として人間を見ざるの風あり、

番頭――接するものは顧客なり、成るべく多く賣らんとす故に購買心を誘起するに妙を得、一見して其買ふ客と買はさる客とを看破す、人を見るの明驚くべき底の進歩あり、

高等官の妻女と小商人の妻女――前者は夫常に外出して智見を開き日新の思想を有するに、妻女は多く數種の來客と下婢等を對手とするが故に、數年にして夫より後るゝこと數等、遂に愚者と見做さるゝことあり、小商人に至つては、日々數多の人に接し、種々の見地を高め、世事に熟し、從て後るゝとなし、故に怜悧なり、

兵卒――兵營にありては、少しく自己より上官なれば之に屈從し、壓制を受く、故に又自己より下れる者を壓制する風あり、一方に叩頭する代りに他方に傲慢なり、

宗教家――眞正の宗教家は特別とし、概して宗教を職業とす

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るもの言行共に温和柔弱謙遜仁愛の念に富むも、而かも彼れ其品行を維持せん爲め往々僞善の振舞を爲すことあり、僞善とは始めより善德を口にする貴重の業と見なさるゝ者の中に行はるゝ者多し、

敎育家――前者と略同じ、敎育家なるが故に始めより善行あると見做さる、而かも二者共に敎育のみにて萬事足れりとするは獘なり、善德を口端に上すの僻あり、

政治家――彼は名を以て生命とし、可成名望を維持せんことを力めて往々奇矯の言行を試む、普通の輩は概して名聲と利慾に奔走す、大言壯語磊落自ら喜ぶ、

哲學者――理論に奔り智識を重んじ、組織に偏し空理に傾き、感情の美、意志の强を欠くることあり、冷然として木石の如く淡々として水の如きもの往々之れあり、概して冷淡にして大理石の心の如し、

幇間――出てゝ力むる所は、人の前に叩頭し、機嫌を伺ひ、優柔にして氣に入らんことを専門とす、故に人と接する柔和、滑稽なるも家に入れは外出して機嫌を取れるの賞として機嫌を取られんと欲す、妻を苦めて不精の顏色を呈す、是れ自然なり、

農民――住む所は人烟稀少の田野なり、交はる所は草木禽獸なり、風籟雨魂なり、故に概して質樸、潔白なり、

商　人――住む所は稠密なる社會なり、交はる所は利益一方の仲間なり、爭ふ所は金錢の利益なり、其狡猾となり怜悧となり酷薄となり又濶達となり、自由を欲し、奢侈に流れ又は悋嗇に至るは常なり、

半農半商――は半村半市に住む、其品性最も淺し、

半商半工――は、商業に巧みならざるも、思ひ切りよき者なり、農商を半は辨務するものは概して道德低度にあり、農の市區に接し、文明の光に觸れたる當時は、非常なる墮落をなすものなり、

是等は其職業に屬する者の一例にして、職業によりて性情の異なるを云へるに過ぎず、之に反して人の性情の職業に影響亦少なからず、假令は磊落なるか爲めに政治家となり、緻密なるが爲めに學者となる如き是れなり、然れは職業と性情とは互に動反動の影響作用あることを知らざるべからず、國民全躰に就て云ふも亦同じ。

日本人は手先きの運行巧みなるが故に、繪畫の如き西洋風を模擬するに巧みなり、而かも其精神に至るまで傳ふるに至らず、露西亞人は剛毅沈重なるが故に、其外交、文學共にスラポニック風を存す、佛人の輕妙華奢なる粧飾品を多出し、英人の自由獨立自治を欲するや、政治、宗敎、風俗、文學、殖民制度皆な其風あり、支那人の貨殖に巧みなる等、各其民族の精神の發表ならざるはなし故に民族の精神が職業に影響すると同時に、職業亦民族を形造するは見易きとなり、國民にして農に偏すれば頑固守舊となり、商工に偏すれば自由論、政治談、空想盛に起る、故に三者は共進せざるべからざる者なり。

兒童研究に就て

久津見蕨村（投）

『女學雜誌』記者足下、足下は兒童研究を以て『情けなき事と云ふ可し』とせり。余は兒童研究に就て卒先して書を著せし者なり。之に就て一言の辯ず可き事あり。コンペーレーが嘆せし如く、米國に於ける兒童研究が、幾んど好事に流れんとしつゝあるは、余の最も好まざる所、我國の兒童學者も亦恐らくは皆之を好まざる可し。足下の云へるが如く、愛なき兒童研究は誠に情なき事なり、故に余は既に之に注意して、余の著書中に、兒童研究の好事にあらず、遊戯にあらざることを明言し、之に就て深く謹愼すべきことを宣説したり（拙著『兒童研究』十五ページ以下）。加ふるに別に、『兒童は物質にあらず、又非情の物にあらず、人格を具へたるもの也。之を研究するに當りては、之を試驗せざるを得ずと雖、其試驗は物理化學の試驗の如く、之を物質若しくは原素として取扱ふべきにあらず、必ず人として遇することを忘るべからず。物として其破壞毀滅を意とせずして試驗に供ると、人として之を貴重尊敬して試驗するとは、大ひなる差別なかる可らず、原素は之を得るに費用なからざるを得ずと雖、尙物なり、之を失へば再び償ひ得ん。兒童は誠に人の子なり。若し其一指一爪を損し、知覺力神經系を傷けなば、決して之を償ふこと能はず。啻に償ふこと能はざるのみならず、父母兄弟をして長く悲嘆を重ねしむ可し。而して是實に人が其同胞を玩弄して、遂に之を傷くるの不德を犯せるもの也（中畧）。兒童研究が聊かにても、如上の傾向あるを見ば、如何にしても之に忍ふ能はざる也』と云へり（『日本敎育』第四號）。兒童研究をなす程の者

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は、斯かる精神を育せざるはなかる可し此精神を以てする兒童研究、是果して情なき事なるか。抱腹絶倒すべきものなるか。記者が愛なき兒童研究を嘲けるは悪しきに非ず。深く教育學界の精神思想を覗はずして漫罵するは、余の服する能はさる所なり。敢て一言を呈す。

編者答て云く、蕨村君の文中既に兒童研究に付ての時弊を痛論せられたり。前號女學雜誌の所論亦た同意義に出づ。蕨村君の痛歎せられし所、即はち亦女學雜誌の慨言せし所、豈に圖らんや君によりて此の非難を得んとは。希わくば微意の存する所を察せられよ。

盛んに外國人と結婚すべし

次郎

內地雜居は既に行はれたり、之よりは家庭雜居を行はざる可らず。盛んに外國人と結婚するの新風俗を起さんとは、吾人の願ひなり、務め也。

內外の雜婚には、種々の愉快あり、亦利益あり。一も弊害あるとなし。然るに、世人の尙ほ何んとなく氣の進まぬ樣に見ゆるは、蠻風の遺れるのみ。之と云ふ立派なる言ひ分のありてにあらず。

但だ一つ、尤ともらしき理由は、從來麗はしき雜婚少なく、忌はしき女が毛唐人に買はれる樣にして嫁ぎたる醜態を見て胸くそわるく、夷狄に膚を許さぬと言ひけん古人の何んとなく高尙げに見へたる歷史に由れり。然し之は下等の雜婚を見て嫌になりし丈けにて、固より上品なるものに就ての故障にはあらず。茶漬が甘まくなき故、會席料理も好まずとは言はれまじ。

西洋列國などの外交は、其の基礎、互ひの雜婚によりて維持せらるゝこと多し。上帝室王室は素より、政事家も、軍人も、新聞屋も、血を洗つて見れば、所々の外國に親類ありて、之が為め知らず〳〵の內に感情を融和するとあり。

地理を學ぶにも、外國語を學ぶにも、お母サンのお里とか、お祖父さんのお國とか言へば、千里も一歩の內の樣に感覺せられて、識認すると早し。外國の學問が互ひに世界的となる一理由も、無論、此邊より兆さす。

四海兄弟、万國一家の理想は、たゞ雜婚によつて實地に行は

るゝなり。詩に歌ひ、哲學に論ずる丈けにては、至つて間ぬるきもの也。

左れば、日本に於ても追々雜婚を盛んにせんとするに際して、先づ第一に奮發ありたきは御婦人方なり。さしあたり、朝鮮人、支那人などに大いに緣組せられたし。台灣の土人などとも握手せられたし。歐米列國の人とは申す迄もなし。

同じ雜婚にても、日本の男子が外國の女を娶るよりも、日本の女が外國の男に嫁ぐ方望まし。之は、日本の領地と國粹と國語とを擴張するものなれば也。家庭に於ては、男よりも女の方勢力あり。子供の習慣と一生涯とは家庭に於て作らるゝものゆへ、家庭に勢力あるものが、つまりは第二代の人の上に勢力あるなり。我國に在る外國の男子が日本の妻を持てば、其子は日本語をよく使ふ。我國にある日本男子が、西洋の女を妻にすれば、其子は外國語をよく使ふ。所云ゆる合の子に就て此理合を考ふれば、直ちに明瞭すべし。

雜婚に付きて種々の反對論あるとは、無論承知せり。然し乍ら何れも取るに足らぬとにて、皆な杞憂より發す。斷然として顧みず、盛んに隆んに流行せしむべき也。

女學生に對する批評

女學生に對する批評頻紛たり。之れ其の新らしきものにして人の注意を惹くとの甚はだしきが故か。批評の盛んなるは、刺激の盛んなる基ひにして、當局者を戒しめ、用心の種子となる、實は感謝すべき筈のものなれども、左りとて亦た餘り調子外れにして、本末を考へぬ無理なる注文の行はるゝ時は、之が爲めに自づと當局者を誤まらせ、若くは存外の結果を引起し、可憐なる多望の女生をして、半途退學せしむる樣なる不幸も生ずべし。批評者たらん人、先づ其の責任の重大にして、關係する所ろの恐ろしきとを覺悟せざる可らず。

女學生に對する素人の評は、殆んど千篇一律なり。たゞ其の外觀を見て、形容の好惡を言ふ計り、其他に何等の着目もなきが如し。曰く、しとやかの風なし。曰く、生意氣なり。曰く、西洋風なりと。凡そもし此等の弊害なからしめんとするのみならば、わざ〳〵學校に入れて頭腦の鍛錬と、品性の修養とに苦心せしむる甲斐はある可らず。女學校に於て一大要事とする所のものは、斯る些末の躾方にはあらず。もし只だ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

此式の事に掛念せんとせば、僅かに一ヶ月の禮育にて、十分なる好結果を奏することを得べし。何の難きことあらんや。
凡そ、學問に執心する間は、多少の變化はあるべき筈なり。假令ひ化粧をもて美育の一とするも、家庭にあつて此等の事に心がけべき餘裕の多くある時と、女學校に於て苦學第一の事とする時とは自づから相違のあるべき筈なり。
女學生も亦た人間なり、其一生を優勝劣敗の世に投じ、緻密なる思考と、確乎たる意思と、敏活なる手腕とによりて、千種万様の問題を處理裁斷せざる可らず。左れば、女性自から優渥に所有する美の天性と、麗わしき風姿との外に、明確なる頭腦、静朗なる良心を涵養し、一個の女子として獨立獨裁し得べき丈の自信自力を存せざる可らざるにあらずや。今の女學校に於て主として教養する所、必らずや此般の事項ならざる可らず。何んとなれば、其他は家庭に於て或ひは能く之を供ふることを得べきも、此般の事に於て尤とも多く欠乏する所あるが故なり。
然るに、今の女學校を視、女學生を評するもの、苟且にも此種の覺悟あることなく、單に自己の趣味と所好とを標準にして、以て、人の子女と、國家の妻母とを盲斷せんとす。越權も亦た甚だしからずや。
而して之に劣らざるの愚は、女子教育の當局者これ也。彼等局外者の盲評に動かされて、切りに教育方針を變え、屢ば媚びて只だ其の好評に合せんとす。陋劣の極にあらずや。局外者の所言は他山の石のみ、參考とはすべし、必用とすべからず。無責任の地位に立ち、無經驗の言を放ち、淺薄なる識見によりて區々たる注文を爲さんとする時、女學當局の人、豈に一顧を與ふるの價値だにあらんや。たとい、來學者之が爲めに減ずとも、そは何の故に恐るべきか、何ぞ之が爲めに教育方針を動かすべき理由あらんや。吾は教育者にあらずや、其の理想と確信とに随がつて人の子を愛育す、自から是とする所の抱負なかつせば、須らく止むべし。然らざれば、何の理由ありて其の教育を變へんとするか。
嗚呼、世上の淺薄なる批評は笑ふべし、女學當局者の薄信は歎ずべし。批評は暫らくにして亦た變るべし、女學者の確信に至ては、其人出るにあらざれは得ず。故に、要ふべきは、彼にあらずして此にある也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

少女（滿四歳の女兒）と對話

隧本露草

◎民ちやん朝起きたら顔を洗うんですよ、今朝は御顔が少しきたない様ですが洗つたのですか。

答　かを洗つたの――、

◎でもきたないじやないか、

答　いゝえ、このあいだ、學校え行て洗つたから、もう今朝は洗わなくても、もをいゝや、いやだい〳〵。

◎民ちやん、小供の喧嘩に親が出て御上に聞えて甚だ迷惑腹が立つと云つて御覧なさい。

答　はい。こもどの、けんくわに、をやまでゝ、かみにひかえて、はな〳〵めいあく、はらがたちゆう〳〵。

◎民ちやんは男か女かどちら、

答　民子は女だ。

◎其れでも民ちやんの頭の毛は短くて少ないもの、女の人の毛は皆な長いのに、なぜ民子の計りは短いの、妙な女だねい。

答　いゝえ、民子はやつぱい男こ。

◎それでも民子は女の様な顔して赤い、衣服着ているじやないか、

答　いゝえ、にいちやん、やつぱい民子は、をとこをんな、だ。

◎私は是れから臺灣え參りますが民ちやんに何にのをみやげを買て來て上げましやうかねい、何んでも民ちやんのをこのみ次第、言て御覧なさい、

答　臺灣え行くのはどをして行くの、ごろごろに乘たり、お車に乘つたり、かつこはいてあるいたりして行くの、どをして行くの、民子も行きたいなあ。

◎臺灣え行くにはごろごろ（滊車を意味す）に乘つたり、を舟に乘つたりして、之れから民ちやんが十も百もねるあいだ、かゝつて行くの、そをだから私と行くとさむしいよ、道でをなかがへるよ、をとなしくして待つていらつしやい、おみやげは何んでも買つてきますよ。

答　そんなら民子は今日たくさん、まゝたべて、あした、上野の動物かんえ行くの、そんなら、にいちやん臺灣のをみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

やげは、どんぐりか、てつぽだま(駄菓子の名にして「どんぐり」とは白き飴にてまるめたるたま、后者「てつぽだま」とは黒き飴にてまるめたる「恰も弾丸の如き形ちを成すが故此名を附す多く村里の童子等が食するもの一個一厘ぐらいの價)を澤ちやん／＼買て來て下さい民子はよく眠て待つて居ます。さよならバイ／＼。

◎民ちやんわ、よくお湯を飲むねい、

答　兄ちやん、を湯を飲むと皆な其のを湯は涙に成つてしまうの。

◎なぜを湯が涙になるの、

答　其れでも涙はあついもの　あついを湯を飲むからあつい涙が出るの。

◎其んならを茶を飲むと、どうゆう涙が出るの、

答　黄ろい涙が出るの。

◎を月さんはなにでこしらへてあるの、

答　火でこしらへてあるの。

◎なぜあの高い所に火があるの、

答　あのねえ、天に丸いあながあいていて、朝になると其こをふたしてしまうからを月さんはなくなるの、そをして夜るに成ると其ふたがあくから又を月さんが出るの。

◎其のふたは唯れがあけに行くの、

答　天子樣が、かあちやんに言てかあちやんがあけに行の

(因記此子數年前母を失へり、基督教に於ては總て死したる者は天に昇るとの申傳へに因り全く己が逝ける母は天に昇り居るとの考へより天のふたを天皇の命に依りて開きに行くとの意ならん)

◎民ちやん人間は何んでこしらへてあるの。

答　人間は肉と皮と血と骨と筋と毛でこしらへてあるの。

◎そをしたら民ちやん肉は何んでこしらへてあるの、

答　肉はねい、を魚の肉でこしらへてあるの。

◎皮は何にでこしらへてあるの、

答　皮もを魚の皮でこしらへてあるの。

◎血は何にでこしらへてあるの、

答　血は赤い「インキ」でこしらへてあるの。

◎骨は何にでこしらへてあるの、

答　骨はを魚の骨でいきてるの。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎筋は何にでできてるの、
答　筋は白い糸でゝきてるの而して西洋人の筋は青い糸でゝきてるの、
◎毛は何でこしらへてあるの、
答黒い糸でできているの。

薄緣

有邪無邪

春雨烟る欄干に秋風すさぶ窓の戸や
浮世の空の高樓は夕あしたの雲近し

呉姫淸江に泛ぶ時袖に蕩りの起つこゝろ
昭君關を越ゆる時琵琶の亂れに花ぞ散る

妹背の山に霎たてば吉野の川に波あれて
月と花とのいざよひをいかに嫉妬に泣かしけむ

義理と情けの柵に涙盡きぬる思ひにも
あはれむかしの緣あらばせめては夢に通ふらむ

花の散りくる欄干に我もかこたし世の恨み
月のかくるゝ窓の月に君もなげくな身の因果

鐘のあはれを鳴らむ時風に心を捨てよかし
いづれを露の草の上に見よやこの世のさびしさを。

雜録

春花秋月（述懐小説）

露生

（一）

今茲二十の青年あり。尋常ならば、浮かれ歩るきもすべく、壯語大言も吐くべく、盛んなる空想も畫くべく、多少は道樂もあるべきに、如何なる變りものに、生れてか、古寺の一室に閉籠もりて容易に外に出んともせず。晝尙ほ窓を塞いで暗中に死せる如く床に眠れるともあれば、夜深けて俄かに戸を推し亂塔古墳の間だに蹲踞まりて曉に徹するともあり。食を忘れて書を貪る時は太はだ讀書を好むやうにも見ゆれども奮然、書を擲うち書を引裂き、十數日一卷をも開かで兀座唯だ默々たるともありて、爲す事端睨すべからず。秋の初より强ひて此處を借り、寓居せし初めの程は、寺僕は言ふに及ばず住持も些さかならず驚ろきしが、慣れてはさすがに氣の毒にて卒爾ならず取扱かへり。況してや、此の青年ふとして例の

病の起りたる氣色の時は手の着け様もなけれど、常は至つて温厚にして慈悲深く、物言ひ高尚にて何處となく奥床しき質なれば、寺僕は妻もなく子も早く死したる不運の經歷に佛となりて、不思議に此の青年が可愛ゆく、慕はしく、親身も及ばぬ世話を爲しけり。住持はさすが佛門の徒なれば、淺墓なりとも一通りの心得はあり。何事か秘密のある故と心に推して仇には思はず、病める人を扱かふ手ごころにて折々は打語らひけり。左なくんば、此の青年、たとい力ある壇下の紹介にて由緒ある家の子なればとて、斯迄で我儘に寺門を驚ろかすとは許されざりしならん。

秋老いて草枯れ、寺庭一入物さびしき頃、就中、雨蕭々として、新墓の白提燈、風に破るる折節は、呻吟の聲止む時なし。時として大喝、劍を拔いて舞ふかと見れば、忽まち亦た打沈みて、サメ〴〵と泣く。寺僕が忠實なる苦心にて造りし手製の團子、小大不規則なるを十ばかり皿に盛りて、番茶を添え、さぞ鬱陶しく御座い升うと言ひて、持ち來る信切をツヨとも聞かぬか、左りとて大きなる眼にはチッと見つめ乍ら、一言も返辭せず。また〳〵例の御病氣かな、と笑ひつゝ彼方に行くを見送りもせず。

雨の翌日、快ちよく晴れ渡りたる晝後、青年は、小銃を肩にして、寺門を出で、橋を渡りて野に遊び、野を通りて、向ふの小高き山の下に息らいたり。快晴の日、午前は頭の心地善けれど、午後は一層苦しきが例にて、日光のギラ〳〵する、空氣のいやに熱きなど、悉とく癇癪の種ならぬはなし。斯る折は、たゞ當途なく小銃を放ち、音の轟然たる響によつて頭痛を散らすを妙となし、遠慮なく、寺内に發砲して曾ては巡行の査官に咎められ、面白半分からかひて大議論せしとのありし時、珍しく住持が苦き顏せしとのさすがに氣の毒にて、今日はわざ〳〵野外に出でしと見へたり。

固より射的に慣れぬ身なれば、小鳥一匹射とめし經驗だに無かりしが、此日はふと其心になりて向ふを見れば、折よく野雀兩三羽、稻穂の隱より現はるる見へたり。忽まち、銃を持直して相應に膝を立つる時、眺むれば、雀等何の氣もつかぬげに、最と睦ましく何事をか囀づり合へり。親か、夫婦か、全胞か。首をかたむけて語り、つゝき合ひて語り、伴ない歩ゆみつゝ語るらしき躰なり。青年、きと銃を執り乍ら、忽ま

ち投げ出せば、村雀驚ろき、散亂して飛べり。
嗚呼、人間、何の權利ありて禽獸を射殺すことを得る乎。汝、何の價値ありて、万物の靈長など、稱え居れるや。禽獸にも、愛情はあるべし、靈魂はありや無しや。其一生は何の意味に過すや。など、例の懷疑僻ムラ〳〵と起りては、天地も所狹まく、白晝も小暗く、ただ茫然として思ひに沈みけり。
此間何時を經しやらん。誰も知らず。早や夕陽、山の端に近く、晩烏鳴き渡る比とはなれり。彼を生ける人間とも思はざりしか、切めては案山子とも思ひしや、烏三羽、ふと青年の傍ちかく飛下りぬ。
存外にも生きたる人間なれば、之は失策とでも思ひけん、可笑しき樣にて、烏の飛び去るが面白く、青年初めて顏を擧げて見てありしが、餘りに滑稽なるにつられて、石を拾つて戯むれに投ずれば、烏は石の屆かぬ程に少しく飛び、顧りみて吾を弄ぞぶの狀なり。青年少し憤然として、再たび石を拾ひ起つて強く投ずれば、亦た好き程に飛び去りて再たび吾を顧みて嘲笑ふ。己れ、無禮、我を馬鹿にするよと、小銃をつ取り、五六歩かけ出す權幕の烈しければ、烏は大飛に飛んで、岡の上の松の樹に留まれり。青年怒つて早速に火蓋をきれば、煙もふ〳〵、烏の聲、カア〳〵。

（二）

空氣の清淨なるを要する病患とて、岡の上、林の中にて、日當りよき南に向ひて閑けき別宅を構え、殆んど六年にわたる長き月日を、ただ攝生の爲として空しく過ごす意氣地なさ、丈夫生れて此の肺患に罹りたることそ、死ぬ尙ほ及ばざるの恨みなれ。妻の健氣なると、二人の子の愛らしきとが、只だ日々の眺めにて、其他は天氣の晴曇、二三の新聞紙、慕わしき友の慰問の書の外に、毎朝々々之と云ひて待つものもなし。元來血の多き生れにて、何事にも慷慨激歎して止まざりし當年の意氣今は跡なく失せ、自から驚ろく斗り蒼白弱胆の人となり、我から事々に控ゆる樣にして、惜しからぬ命を强ひて引伸すは、夜は衣帶も解かず晝は傍わらも離れで看護に一心不亂なる妻の勸めの、うれしくも亦忝けなき故と、如何なれば斯迄で愛らしく斯迄で執着するかと自から疑がふ吾子の生ひさきの見たければなり。一年三百六十五日、一日として床

を片付けしともなし。今日は誕生日なればとて或日拂曉より天氣模様のみ氣にせしが、幸にして一天快霽微塵の雲もなくそよとの風もなし。今日こそはと試みに蓐を押片付け、八疊の例の居間を潔よく掃かせて、椽側まで靜かに出でゝ庭の樹木を眺むれば、樹木倘ほ青々、菊花麗わしく笑ひつ、人間に恨事ありとしも思はぬべし。折節、小學校より歸り來し妹の兒の其時八つなるが、いつも愛相好くおしやべりして父の氣鬱を散ずるにも似ず、切りに不審顔して母の袂にまつろひ、お父さまはモウお直りなすつたの、モウお咳は止んだの、肺病てえの無くなつたの、と聞くいぢらしさ。今日は大相お宜しいのだからネ、いつもの様に學校のお話しをなさいませ、そして今日はお父様のお誕生日ですから、色々あなたのお好きなものもこさへて置きましたよ、サ、早くお父様の所ろへお出なさいまし、と言はれ。うれしいと、お父様のお床が無なつたト、ついぞ見しとなき異様の片付方、幼な心にも蓐の年中引つめられしこそ第一の悲しみなりけん。然し乍ら、母の悦こびと、小女の元氣も暫しの間にて、ふと木梢の木の葉少し動き初めしと思ふ途端、病者は早くも寒氣するとて、又々急ぎ床に入りぬ。床に入れば、咳も元の如く、痰も元の如く、苦味ばしりし顔色の一入悪しくなりしは、扨ても〳〵腑甲斐なく病の重もりし哉、吾病はとても愈ゆる時のあらざるべしと、又も今更の如く例の考え事を初めし故なり。

折角、お起遊ばしたのに、ホンにいけませんでしたネ、お寒氣がいたしますか、急に天氣が變りまして、私どもでさへ、ちとゾク〳〵致しますもの、御無理では御座いません何んの〳〵直きに下りませうと。熱度計を見ながら氣輕ろく、慰さむれど、斯迄衰ろへ玉ふ御姿、御顔色、もしや今にもヒヨンなことのありもせばと、さすが女の氣苦勞に、こみ上ぐる胸の涙を奥齒におちつと噛みとめ、わざと、そこらを片付くる眞似しける。

お好、モウ己はどふしても直るまいかノウ、今日で滿四十歳、爲す可き事の多い世の中に碌々としてコンナ態は何んだ、お前には苦勞ばかり、苦勞を爲に私の所ろへ來たよふなもの、いつそ早く死んで里に歸つて貰つたらと思つたともあるが、アンナ可愛いゝ奴があれば、夫も出來ず、年が年中、看病ばかりしてサゾ勞れるだらふノ、お前が丈夫に居て呉れば萬事

めちや〳〵だよと。今更の愚痴。今更のくり言、今日更めて新らしくは無けれど、身を切る樣に感じて、ヨヽと泣き出し。あなたの又してもソンナ事を仰しやいます、私が斯ふして御看病の出來ますのが、どんなかられしう御坐い升う、每日每日お傍に居るとの出來ますのも、ホンに御病氣のおかげだと笑ふともありますのです、夫にお年は若かしお氣性はあり、あれなら切度直ると、鈴木サンも仰しやいますト。言ふを遮ぎり。ダガ、お好、元氣はもう無くなつたよ、どふしてコンナ弱い氣性になつたかと、自分ながら愛想が盡きるよ、お前が見てもそうだらふネ、と言はれて、妻は毅となり。イエ、そうお考え遊ばすのが不可ません、御氣性があり過ぎますからまだ無理を爲さつてなりません、ちと温和しくおなり遊ばして、モット病人らしくなさらんければト、鈴木サンも仰しやい升と。醫者が金城鐵壁にて、此の城に據つて主張する外力あるものはなし。ソウカノウ、之でもまだ無理をすると、鈴木が言ふかのウ。さびしき微笑を漏らして寢返り乍ら天井を睨らむとき、心中少しく得意らしき。我思ふとも人の言葉にて確かめねば確かならず、死ぬる〳〵と言ひ乍ら、中々ど

ふしてと反對さるれば心うれしく、我腕を握つてよくも痩せたるものと歎息しても、お顏に少し肉が着きましたと言はるればフト其氣になる。宛がら子供に還りし病人の、妻となり母となり、醫者となり看護婦となり、我も一日〳〵身を刻つての心配苦勞。我身が柱ぞと思ひ直して、養生第一と覺悟すれど、食事の味よき日と云ふはなく、分けて此頃は度々寒氣がして熱の上るとも屢ばなれど、もしや醫師の診斷にて、万々一、ソレと言われなば、死の宣告を受けしよりも尙つらく。我身よりも我良人の失望落膽如何ならんと、ちつと隱して自から用心は爲て居れど、吾良人にせよ、我にせよ、もし一旦の事ありて彼の可愛ゆきものを後に殘さば、年もゆかず、身よりもなく、定めしアノ孤兒院でいつやら見た子供の樣な、さびしい心になるならん、憂き、つらい、悲しいとて未だ知らぬあの子等が、どんな所にどふなるであろ、二人だけの同胞で一生父もなく母もなく、大人なつて若しまた其の一人でも欠けたらばどふするであろ、太郎は男ゆへまだしもなれど、雪一人となつて、世界中に親身は一人もなかつたら、あの子の無邪氣な美くしい姿が一層憂ひの種であらうか。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

まだ無きヿの有る如く、遠き末來の眼前に現はれて、子供二人手を引合ひ、我が墓に詣いる姿の歴々として心に浮び、又二度添ひ我なき后に來て、二人がいぢらしい遠慮する樣子の想像せられ、起き乍ら夢み、泣き乍ら夢むは、夜も確かとは眠らぬ疲勞の人の憂き時なり。

早や夕方に近し、父はうと〳〵まどろみ玉ふを、かいまき少し引上げて、ソト被わんとするとき、太郎は元氣よく歸り來り、大聲にて何か言はんとするを、叱と止め、立ち乍ら制する途端、銃聲一發、鳥聲はげしく、母は突然其處に倒れぬ。

些事些言

無識庵主人

◎今の兵卒なるものは、其性行修らずして社會の風紀を害する一要素として數へらるべき種類なり。新宿町のみにて一日平均二百人登樓すとかや。而かも田舍より出でたる兵士は東京の婦人と關はるヿ少なく、却て田舍出の婦人と親む。蓋し東京に慣れたる婦人は氣位高くして田舍出の兵卒輩を相手とせざるも、田舍出のものは意氣能く適合するが故なり。又田舍に於て兵卒の風紀を亂るは、質朴なる田舍人の尊敬を受くるヿ甚だしきが爲めなりとす。

◎都會に住する人は歩行するヿ速かに、談話するヿ急に、用辨立所に定まる。其家庭を見れば各業務に忙はしく、互に雇はれたる人士の集合するに似たり。長閑なる風、靜肅なる樣を見るヿ稀なり。都とは多忙なる人の集合せる所なりと定義する可ならんか。

◎都に在りし人の地方に到りし時、都の話を聞かんと望まるれば、凡そ特殊の異事を談ずるを常とす。出火の樣も三四千燒失せるものを細かく談じ、商業の事も正月二日の初荷の樣を談じ、建築の事も大廈高樓の巍然たるものを談ず。語る者は自らも壯大珍奇に感ぜしものを抄話するなり。而して聞くものは都は常に斯の如けんと想像す。愈々來りて實見すれば其想像に反するを以て「來て見れば左程でもなし富士の山」の嘆を發するに至る。

◎余屢々地方より親戚朋友の上京せるを案内して東京見物に伴ひしヿあり。而して常に聞く所の言は「千種万種の複雜せる社會に對つて何程見るも同じとなれば最早歸宅せん」との

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

言なり。惟ふに一通り外面を見るもの皆斯の如し。學問の如きも普通當然の事のみ學べるもの、挫折するは恰も此見物人と同じかるべし。實は表面の一少部のみ見たるなり。

◉當今民人の最大缺點と目すべく、之より必要なるもの殆んど比類なしと認めらるゝ一事は、抑も何者なりやと問ふものあらば、余は明かに斷言すべし、沈思瞑想の一般に缺如たると是れなりと。或は名利、或は金錢、或は學問、或は職業、皆之れ人の走る所にして又走らざるべからざる者なるべしと雖も、靜肅端坐沈思瞑想するの修養を欠くが爲め、萬事萬端、浮きたる樣あり。宗教的に云へば默禱の衰頽にして之れ最も恐るべきものならずや。

◉都人士は借家に慣れて終生子孫に至るまで借家に住むも平然たるあり、地方人は借家を以て大耻辱となす如何なる損害を蒙り艱難を凌ぐも元の實家を恢復せざれば瞑目し難しとなす。墳墓の地當に然るべきなり。此情ありて家庭和睦し、土着の念強く、愛國の性情を起す。而かも商工に從ひ移住を企て便宜の改進を計り廣く事を爲さんとするには頗る妨害となるとあり、人間到處有青山底の念は、容易に起らざるなり。海國人には最も不適當の見と云ふべし。

◉匿名にて文章を書くは古より珍らしからず。新聞雜誌上種々の論議を爲すに當りて匿名にして雅號を記するは、今日の文壇は多數に過る程なり。余の從來用ゐたる匿名雅號二十有餘種あり、今日尚八種餘を用ゆ。人あり問ふて曰く何故に然く匿名し又は雅號を用ゐるとを爲すかと。余れ答へて曰く、第一は自己の眞價を計らんが爲なり。名を署して名家を論評すれば、其名の爲に答辨せざるとあるを先防ぐ。又未だ嘗て世に見ざる名を以て文を書、而も尚人の注意を惹き諸所にて轉載等を爲すあらば、其書きたるもの多少の價値あるを表すなり。人あり彼某は匿名らしきが、實際何人ぞやと問ふ時に當り、余れ知らずと答へて其書けるものゝ價値を反問す。斯に於て乎、其評論を聞くを得。以て私かに自ら戒むるなり。署名すれば大概世辭的に賞揚するか、然らざれば無言なるは常なり。匿名は此弊を避くるに便なり。第二は必要より來るとあり。嘗て雜誌を刊行せる際、特志者一二人の外には未だ嘗て寄稿を乞はず、來るものも多く拒みて容易に入れず、況してや叩頭依賴する如きとをせず、故に九分九厘は凡て自己の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

筆なり。有賀長雄君の流義にて外交時報の如く、五六題に同じ名を署するも可なれども、躰裁上種々の社員ありて色々に筆を執るが如く見するは、讀者に對して便利なり。故に悉く變名を用ゐざるを得ざりしとあり。第三は名を得るを好まざるなり。自己の價値を知らんとするの念ありとも、名の稱されんとは望まず此故に十數年前より八分通りは種々の變名を用ゐたるなり。如今、全く他人の筆に成りし者に自己の名を署して耻ぢさるもあり、飜譯して自説の如く記し、以て其名の稱されんとを望むもののある世の中なれども、余の此惡弊に陷らざるは自ら幸ひと感ずる所なり。第四は研究の目的は遠く學問は生涯を要するとにして何時も極めて未熟なりと信ずるが爲めなり。未熟のものは世間の風露に打たるゝを要す。署名すれば情實より非難の聲少なきか、或は猥りに多きを致す事情あり。余は此弊を避けんとせり。而して匿名雅號の價値は毫も限定せずして絶えず變更せしむる點にあり。第五は何の意味なく徒らに種々の雅號を附するとなきに非ず、之れを無意義の所爲と稱すべし。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

罸を熱海の

さまよひ日記 《其一》

悪魔の子 有美

珈琲精入れし砂糖水に、甘納豆たゝき込みなどして、したゝか詰めこみしあげくの果が、苟ならぬ腸ゆるまして、下司婢れかへりしも、南石先生が得意の達筆談に、ヴエナスの君が烟の如き放談さへ打ち交りて、話は時ならぬ花を咲かせつ。『名刺のなければ、少し書きたまひてよと我れの願へば、先生、墨濃く黒ろぐろと磨り流して、色々の難有き肩書つけなどし、廿枚がほど、怪腕を揮はれけるが、そのうちに時の移りて、微笑み興ずることもかなはず、殘り惜しく別れぬ。されど、こは昨夜のことなり。

悪魔の子は、凡て悪魔らしく始じめざるべからず。されば、我が旅びも、赤酒を以て始まるべし。新橋のほとりに、近頃惠比壽ビールが開けるビーヤ・ホールといふものありて、氷冷せる麥酒をコップ賣にすると聞けば、『ものは試しよ。一杯あほりて、腥々の物眞似するも一興ならずや』と、今日滊車を待つ間に、例のホクホク顔の惠比壽様を目標に、その

うちに入りぬ。こは二階なりき。そこ此處に据えられたるテーブルに、或は煙を吹き或は杯を擧げ、談ずるあり笑ふあり〆て五十人にも餘りぬべく、仲々の大繁昌なり。これも惠比壽大黒福の神の御利益にや。」此處にて供ふるものは、ただ酒のみなれば、仲には階下の水菓子屋に、林檎の皮むかせて、後生大事と、兩手に一つ宛捧げ來るもあり。また若き書生の、近眼鏡に袴短く身拵へせるが、定價正に八錢といふ牛肉の鑵詰切り開きて、友の二三子語らひつゝ、意氣昂然と梯子を昇り來るなど、面白さ限りなし。『我れにも小を一杯よ』と、杯手に受取りて、佛樣に供へしおぶッきの如く盛りあがれる泡吸ひつゝ、淺ましや得度菩提の心をも起さで、持つて生れたる記者根性の悲しさ、巾着切りじみたるキヨロ〳〵眼に、そのあたりそちこち見廻せば、四面の壁は皆な可笑しきポンチ繪にて、主人公の惠比壽樣は素より、種々さま〴〵なる儕輩の、泡だつコップ手にして、醉て躍るを畫き彩れるさま。一として好笑の種ならぬはなけれ。中に一人の僧官の、聖十字のしるしさへおかれたる紫金の祭服着けたるが、陶然として足もしどろに醉へるあり。これぞ、一度は牧司の眞似ごとせる、我が繪姿なんめれと思へば、人知れず噴き出さんほどのおかし味あり。さるほどに、酒の勢ひ當分と四肢五體にしみ渡りて、顔はポカ〳〵胸はどき〳〵、これをしも戀の酒なりせば、仲々安くはあらぬものを、さても一杯五錢とは、至極安直のものならずや。我れは醉ひを隱くせぬ性なり。

出でゝステーションに切符調へ改札口通りて、急ぎさる車に入れば、これはしたり、茲には近頃基督教界にやかまし屋の評判高き、記者の○○君あり。我が腥紅熱に罹れる如き面持見て、如何に思ふらんなど考へ行くうちに、君は大森に下りて、しばし窓のほとりに語らひしが、笛の音して車の動きければ、我れを辭して妻と子と出で迎へる邊りに行きぬ。その相見て互に微笑める樣、わがひがめる眼にも、美はしく見えたり。されど、嫉妬は惡魔の子の本性なりといへば、また羨ましくも見えたるべし。それにしても、我が身の身仕度のみは、草鞋、脚絆に菅笠一つ、西行など古き法師のもの眞似して、惡魔らしからぬも、殊勝ならずや。されど、チエックに預けたる鞄のみは餘計のものにて、中にはバイロン、ウ

エルテル、外に美術の書二三冊と女學雜誌の合本などあり。凡そ今時の似非西行は、格別のものと見えたり。

目ざすところは何處、未だ確かにはさだかならねど、國府津とは微かに心ぎめしつ。されど、この夜は南石先生の來り會せらるゝといへば、之を樂しみに横濱に下りぬ。既に露草君の迎ひ出でらるゝに遇ひ、南石先生も稍々約には遲れられたれど、深夜の頃には來りともなはれ、明くれば八月廿九日といふにて、雨蕭滌と降りしきり、何となく氣は進まねど、紫苑山人が所謂『赤きケットに菅のあみがさ』輕く、尻からげさへして、片手に煙草燻らしつゝ南石先生に送られまた車に入りぬ。大佛を拜まんと鎌倉さして行くなり。

鎌倉には、さる夫人の、妹伴れで病を養ひつゝあるがあり、坐敷も大分廣しと聞くまゝに、そが許に一夜の宿借らんものと、鞄は之を背負ひ、笠とケットとに身を固め、雨のうちをショボ〳〵とたどりゆけば、途に能く見知れる紫苑君が女中に遇へり。この女中、としこそ十五六なれ、巣鴨近隣に名たゝる才者のことゝて、我れを見るや、辯舌滔々流るゝが如く、愛嬌とお世辭のありとあらゆる言葉を並べて『いらつしやる』の『いらつしやらぬ』のと氣輕く我れの案内すれば、いつの間にやら、我れ知らず其辯舌に醉はされて、紫苑君の裏の甘蔗畑に入り、とんでもなく名歌の材料となりしも難有けれ。戀ひに醉ひ、酒に醉ひ、さては女中の辯舌に醉ひ、兎角醉ふが我が身の病なるべし。日も暮れければ、これも東都の教界にて一騎當千の豪の者、東海居士といふが訪ひ來る。

惡魔の子が詞にならひて　瑞溪子(投)

濡れまじさ
　寄り添ひてゆく　ふたりづれ
　言葉もなしや　傘のうち
すさむ嵐のそれならで　心は胸にさわぎつゝ

まゝなれや
　言はでは飽かれ　おゝそれよ
　ろゝは戀の　定なれば
流す浮名もいさわじや　死出の三途の河までも

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

痴　憂色あり
　恨みのかずぞ　吾れは知る
すてられて　野に咲きいづる　ひなぎくの
朝に見れば　しほらしや！
　たまの白露　いと重たげに！あゝ！
きしても見ん　吾がさこに
　それよ　せめてものかたみに！

六甲山の夏景

松山高吉大人作
菜女 記寄

煙か霧か、白雲か、峰にたなびき、谷にみち、或は麓に立ちのぼり、千態万狀にあらはれて、ながめ盡せぬ、六甲の、山はいつしか、隱れゆき、今見し梢に、見えわかず、並ゐる人の、面さへも、知られで聲に、知るばかり、あやめも分ぬ恐しの、狀と見るまに、やゝ晴て、彼處の間、此處の隙、おほへる衣を、脱ぐごとく、張りたる幕を、ひく如く、忽然にいでくる、はりまがた、吉備の遠山、あはぢ島、武庫の浦々、なにはづに、つゞく和泉路、きいの山、いづれか見えぬ、みえ渡る、青海原の、をちこちに、煙をたてゝ、走りゆく、船は眞黑く、帆をあげて、數々はする、舟白く、紺錠湛ふる、水のおも、繪師も及ばぬ彩色に、自然の筆の勢は、妙に奇しく幾變り、容貌をかへて、活る畫を、ゑがき見すらん、朝夕に。

六甲の朝げしき

白雲はるる、絶間より、あらはれ出る、瑠璃の海、けぶりて浮ぶ淡路島、金色きらめく、朝日影。

岩屋の雨景

呼べば答へん、須磨明石、今朝は雲煙模糊のうち、繪島の松も、ほのかにて、磯うつ浪のおと高し。

湖上を渡り艱みし蜻蛉に寄す

岩野泡鳴

天地人五號にわが「秋の蜻蛉に寄す」る詩あり。此詩の第五號第六號は同詩と關係する所あれば、讀者、乞ふ、參考せよ

昔ながらの琵琶の湖
漣平らかに風和ぎて、
治まる御代の面影を
天に向つて示せども、
青き底なるうろくずに
菱の網目の迫るごと、
しげき悲みまつはりて、
渡り棄しか水とんぼ。

水より出でし物にして、
その水故に艱むとは、
世に生れ來し人々の
この世苦む如くにて、
尊とき釋迦が御教の
約束ごとか、如何なれば、
淺瀨の葦を飛びかはで、
この大わだに溺れけん。

比叡の御山は西にあり、
近江の富士はその東、
周圍七十五六里の
岸邊は遠きたゞ中や、
斯る深みをいち葉の
浮べる舟に流れ來て、
わが持つ櫂のその端に
とゞまりしこそ哀れなれ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

羅綾の羽根を傾けて、
いとゞ重げに思はれつ、
肩より浴びし白露を
ふり拂ふべき力なし
しり尾引きつゝわが櫂を
傳ひてのぼるその樣の、
つかれ果てゝやしほ〳〵と、
あゝ、是れ、何の使ぞや。

口は同じく戸ざせども、
色にうれひの響あり、
姿は之も變らねど、
樂しき戀の光なし。
されば見よ、わが大覺の
ひじりの歩みあらはれず、
かの乙女子がより頼む
星ありとしも思ほえず。

狹き限りに限られて
安きを得ざるものゝごと、
かれ一もじのいきほひは、
之には折れて二と成りつ。
三界衆苦、日の影の
西に散らけし夕ばえや、
小胸を開くすゞ風に
漸くいきをつぎにけん。

羽根を動かし、尾を振ひ、
首をめぐらし、足を擧げ、
勢多の川べにうつ蟬の
殼脱ぎ棄てしけしきもて
まとへる露をふり落し、
既に絶えにし玉の緒の
いき返りたるこゝ地して、
いづくともなく飛び去りぬ。

あゝ、是れ、何の使ぞや、
一の聲を殘しけり。
聽けや、われこの十餘年
相尋ねゐし友垣の、
いつしか父を失ひつ、
兄はあれども、母あれど、
その身にすべて引き受けて、
をみなの腕をかこつあり。

花のあしたに世の子らは
晴れのころもを競へども、
月の夕べに人妻は
靜けき宴を開けども、
なさけの綱につながれて
涙の淵に沈む身は、
身づからこゝろ勵まして
浮びし出でん甲斐を無み。

柳の糸のつきなくも
いきながらふるそのいのち、
絶ゆるを待てど、さりとては、
頼るべき櫂のなからめや。
かれ復細き筆嚙みて
はかなき事をいひ越せば、
われあきつ羽の御告もて
「神に頼れ」と答へなん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○螢文學

舊友渡瀨君多年シカゴ大學に敎鞭を執れしが、今夏、螢文學の研究を旨として、忽然歸朝せられぬ。君曰く螢の火は是れ理想的の火なり。凡そ何等の火と雖ども燃えて熱を發せざるはなし、ひとり螢火の類たゞ否からず。熱なきは消費なきなり。人世の火もし螢火の如きを得ば、光明界、事業界これ大革命の機ならんと。而して、君多年此の秘密に潛心し、研究略ぼ成り、着目既に定まる、今主として、日東の螢文學を探らんとて、一時歸朝せられしなりとぞ。古人かつてうたひけらく、

泣く聲も聞えぬもののかなしきは、
しのびにもゆる螢なりけり。

嗚呼、古の歌人が奇しめる所、今の哲士によりて其解釋を得んとす。科學の美、亦た麗はしからずや。

○人事生物學

人の生機太はだ複雜し靈能就中巧妙なり。大凡そ生とし活けるもの丶中、人ほど研究に値ひするものはあらじ。若し能く生物學者の其の研究に於けるが如くすることを得て、超然として視察、分類、解剖、試驗等の學事に任せなば、快樂自得の最と澤ならんものを。惜しむべし、人や直ちに双對的となりて、絶對的たることを得ず。動やともすれば、利害好惡の念に驅られ、怫然として敵意を生ず。正に是れ超然たる雅懷をもて、微笑しつゝ他の人生を研究しがたきの由緣。

○悟れる人たゞ迷あり

悟りたる身には、迷ひを嫌ふことなし。迷ひも亦た一事實、人生の一樂事なればなり。あながちに迷ひを棄てゝ、迷ひなき世に入らんとするこそ、迷ひの種なれ。看よ、人環の千端万事、もし迷ふほどに假りに執着し、又迷ふほどに暫らく感激せずば、喜怒哀樂の波も立たず、景慕戀愛の趣むきも失せなん。而して、春光を送り、秋月を眺むとも、はた何の面白味

かある。酔ふべし、迷ふべし、大悟之が爲めに去らじ。苟しくも、大悟せず、何をもて其の酔へると迷へるとを覺らんや。酔ひて悔やみ、迷ひて驚ろき、又驚ろき又悔やみ、片時も安き情なき、人間何んぞ可憐なる。聖教時ありて人を縛し、説法多くは疑ひを増す。何んすれぞ直ちに本心に自覺して、自然の態度に安んずることをせざる。若し腹肚の權衡、一定し、胸裏の中心、安着せば、悟は即わち吾心なり。古人明かに其文字に於て示さずや。

○基督教易占

近年、卜筮の道を學ぶ。基督教界の知人嘲けつて曰く、何んぞ其の暗愚なるやと。われ遂に其の意義を識らず。凡そ吾輩基督の門徒たるもの、上帝を崇めて天父とす。漠たる蒼穹に望み、燦たる星宿に仰ぎ、直ちに、親子契合の妙味を得て、極めて親しく天地經營の攝理に感謝する所以のものは、只だ深く基督の垂示に歸依して、切に慈愛の聖父に信事すればなり。左らば、東洋の聖賢多年の秩序により人事の運氣を三百八十有四に分ち、精細分明に榮枯盛衰の機徴を表明する易經の一書に據りて、用いて以て天父が人間に默示訓啓せらるゝ所のものを神悟せんとするに、はた何の奇しきことかある。もし無神の徒にして之を笑ふとせば、少しくは其の理を解す。もし有神の徒にして、其の神告を崇むるの道を嚴そかにすとせば、又明らかに其情を解す。ひとり卜筮を見て直ちに之を愚なりとせんとする基督教徒に至ては、われ寧しろ彼が能く斯教の神秘に潜心しつゝありや否やを疑ふ。

○理想男子

需用は供給を招く。男子が注文は連りに女子に向つて注げども、女子が需要の男子に向つて明らかに告げられざる、男子墮落の一元因たらざるを得んや。夫れ、理想の男子とは如何なるものぞ。此の問題に對して勝手に注文を差出すものは、獨り劣等醜陋なる婦人のみにして、未だ曾て淑女佳人の崇高なる告白を聞かず。大和の丈夫將に彷徨遲疑せんとする也。昔しは一閨秀、小説「理 想 紳士」を著はし、天下の男子靡然として傾倒し、一代の流行頓に化しぬ。嗚呼、我邦の佳人、何んぞ只だ痛恨怨嗟の消極に止まることを爲して、寧ろ奮然積極の

業に着手するとを試ろみ玉はざるや。花蘂夫人の詩に云く、

君王城上豎二降旗一　妾在二深閨一那得レ知
十四万人齊解レ甲　更無二一個是男兒一

千古丈夫をして慚死せしむ、只是れ廿八字ならずや。

○仲秋無月

仲秋の月のみかは。雲を怨み、雨をかこち、待ちし〳〵姿の見えぬに泣く夜も多かりしが、後には見えぬまゝに慰さめ、くもり乍らに思ひやる事を覺えける。只だ鮮やかなる月に對せし時ならで得がたきは、友のひとしく庭に出でて吾と同じく遥かに之を眺めつゝありとの信向なり。鴻雁は北に飛び、白雲は南にさすらふとも、月に向つて相對せんがほどは、見る所同じかるべし。願くは之を以て一の大玻璃鏡とし、共に顔をあつめて其内に於て相見ん。月の雲に隱さるゝ夜は、同もに物思ひを交わし、月の雨にぬるゝ夜は、同もに涙に泣き、月の風に動かさる夜、同もに袂衣を重ねん。左らば、月なき夜半に慰さめあり、曇れる夜に望みあり、そゞろ〳〵しき夜をこめて最と靜かに夢みん哉。

時事

○松本荻江女史逝く

松本荻江君忽然として逝けり、同女史の爲に傳ふべきもの、送葬式場に於ける下田歌子女史か左の追悼文に過るなし、左に其全文をかゝぐ、

嗚呼我か友松本荻江女史は逝けり空蟬の體を離れし魂は呼へとも終ひに還るとなく叫べとも復た來ることは無くげに人の身は朝たの露の夕へを待たぬ習ひなりとも こは最と餘りなる本意なさにこそあれ昨日は手を携へてみすゞ刈る信濃のみ坂み越路の果ての荒磯もいそしみ越えしを今日將たこの靜かなる棺の裡に永く眠ふる君を藏めてしのびこと聞えまつらんとたゞぬば玉の夢路より夢路に迷ひ入りぬる心地ぞするされど悲しき夢を樂しき現にかへさんよしも無ければいでや過ぎにし君か此の世に殘しとゝめ給へる光をかゝげて無きみ魂をも慰めこゝにつとはれたるかた〳〵の心遣りともなしてん

松本荻江女史は同茁萬年翁か長女にして往ぬる嘉永四年六月武藏國秩父郡大宮郷に生れ給へり父の翁は幕末の頃維新の際儒學を以て世に鳴り任俠を以て人に知られたる名士なりき女史生れて穎悟夙に文章の才あり翁常に女史か垂髮を撫して歎して曰く惜むらくは兒をして男兒たらしめざるをと女史幼にして能く書を誦し文を作る嚴父か膝下に在りて學を勉むると廿有餘年すなはち明治八年と云ふ稔女子師範學校創立の折入學を願ひて試に應せられたりしを其學力の秀拔なるか故を以て却りて同校取締兼教授に擧けられぬ斯くて女史は別に家塾を開き師範校に入らんと欲する者の豫備科を置きて深く生從の爲めに便益を計られき故に同校の卒業生中には往々女史か家庭の薰陶を受けたる人少なからさりきとぞこえて明治十七八年の頃秋田縣女子師範學校教頭に轉任し大いに東北邊陲の女子教育を啓發せられき同十九年の夏東上の際痛く時勢に感する所あり奮ひて在野の教育家たらんとを期し又且つ精神教育の基礎を立てんとして釋雲照律師に從ひ深く佛教を研究せられたりしか後父備半時援大久保眞二郎の兩氏に就きて基教を學ひつひに其信徒とはなられしなり其頃秩父に留り留まる

られたりしか後又横井時雄大久保眞二郎の兩氏に就きて基教を學ひつひに其信徒とはなられしなり其頃秩父に邇り留まること一年同地の婦人會を組織し或ひは出て各地を遊歷し專ら我か同胞姉妹の爲めに力を盡さるゝこと多かり爾后宗教の溢奧を究めんと欲し諸般の覊絆を斷ちて神戸女子傳道學校の教授となり且つ神學を修められき又日清戰役の際には深く國民の責を盡さんとを期し上州地方に遊說して軍事公債應募の件を勸誘し神戸に於ては婦人奉公會を起ししばしば廣島に來往して將卒の家族を慰問する等實に身を國家の爲に捧けてつゆ私しを顧ることをせさりき同廿九年の春上京して再び婦人社會の爲に幾多の裨益を與へられ同三十一年に至り大日本婦人教育會擴張の旨を發し東奔西走して大いに會員を募集せられぬ而して今卅二年萬國婦人平和會に贊與しついで日本婦人聯合會の組織を助けられき殊にわか帝國婦人協會設立の際より君が簣を易ふるの今日に至る迄心を碎き身を致して日夜孜々として怠ることをなさずすなはち往ぬる八月の始め吾等と共に都を辭し信越地方に遊說せられたりしが各地至る所みな女史か拔くへからさる豪氣と抑ふへからさる熱心とに感憤せさる者無かりき女史旅窓に在りて談れることあり其中の語に曰く「今の世に在りて眞正に能く神の御旨を知る者は蓋しまた少なかるへし信者の多くは其末に走りて其本を忘るゝにあらすや余近來大いに感し且つ深く期する所あり他日またつぶさに君に計らん」と惜むへしつひに君か深意を洩らすの日を假さゞりしを

女史歸期に先き立つと數日一夕胸痛を感して頗る困難の狀あり同行の人切ちに諫めて靜養せられんとを請ふ女史色をおこし蹶て床をたちて曰く凡そ人一事業をなして其衝に當る將に士の戰場に赴くが如くなるへし傷きて斃ればすなはち已まん誰そ斯程の微疾を以て徒らに貴重の時日を臥床に没すとあらん」と是日猶演壇に立ちて女子教育の必要を說くこと多時聞く者更に女史が病めるを悟らさりき

女史は八月三十一日より胃の痙攣を憂へられたりしもさせることも無くて今九月七日東京には歸り着かれたりしかも病俄かに重りて日を閱すること僅かに七日同月十五日午前一時胃腸病院に於て永眠せられぬ享年五十二とぞ聞えし女史か今般の旅裝中たゞ口にする所は大日本女子教育會及び帝國婦人協會に關する談のみなりき

其歸途車中の作あり曰く

思ふとち道なかたりて夏衣朝たつ旅の面白き哉

嗚呼女史か終りや實に無上の快樂を以てせられぬ女史が靈魂や必ず天上の樂園に遊ばん顧れは多事多難なる婦人問題の前途一大革新の兆候を含まれつゝある今日の形狀女中の俊秀を失へることを公益の爲私交の上哀悼悲惜措く能はずと雖も女史は悲みて逝けるに非らす樂みて去れるなり希くは皇天上帝の能く女史かみ魂をして高きに導き安きに居らしめ給はんとを

此度信越の旅途其提挈のゆかり深く且つ近きを以て强ひて有德深交の諸君に代り已む無くもこの祭りの場に女史か履歷のあらましと追悼の意とを合せ述へ謹みて斯くは聞えまつる事とはなりぬ(九月十七日、下田歌子)

嗚呼、小疵大醇、有爲氣拔、方今の女界此人の如きを要すると切なりし日、俄然として長逝す。之が爲めに深悼するは單だ私情の故のみにあらざるなり。

片々時報

◉英國に於て佛教の婚儀　英國人レーン、フラクス、ピット氏はクヰンスベリ侯の孃子レデー、エデス、ドグラス女と佛教の儀式を用い、去三月三十日倫敦ナイトブリヂの聖保羅寺に於て結婚式を擧たり(密嚴教報)

◉熊谷直實發心考　大江廣海が詠、うち招く扇の風や常なしと世を思ひさるはしめなるらん。雲華老人題二倒騎圖一詩、投レ劔見レ機早、掐レ珠念佛忙、迢々東海道、一向二西方一。直實の發心は父子の情のかなしさに起れり、其宇治橋の爭先を門出とし、敦盛を斬りて歩をすゝめ、爭田にいたりて、終に佛門には入れるなり。直實、久下直光爭田の時に托して西奔して緇に投ず、後年仁田忠常、畠山重忠等の誅夷せらるるに比すれば、明哲保身、無上菩提。(十善寶窟第百十四號)

◉ミルス、カーレーヂ　米國カリフホーニア州ミルス女子大學及專門校の本年學則を寄せらる。中に就て日本婦人の留學を見ると左の如し、

大學三年生に今村茂子(文科、高岡の人)

專門校撰科に松田幸子(山口の人)
豫備校八級に長谷川熊子(宇都宮)。六級に西川かめ子(札幌)。
四級に日野ちか子(横濱)あり。

⦿廢娼　島田三郎君曰く、予輩は法律の力を以て醜業其者を絶滅し得べしとの空想を懷く者に非ず、公娼の存廢は、此論點に存せずして制度を以て之を正業視し、政府が公衆に醜業を紹介するの不理不正失態變習なることを攻擊するにあり。存娼論とは、從來存する者を遽に廢する能はざるが故に、其儘に放置するの謂なり、然れ共近日栃木縣其他に於ける公娼論は、一歩を進めて新たに其制度を擴張せんとする者にして、予輩は目して興娼論と云はんとす。

⦿女子教訓書　多年島尾得庵居士と事を同もにしつゝある、直ちに同居士の名と共に連想せらる川合淸丸氏は、其娘の婚禮に對する家訓を書與せられしもの、やがて近日出版の女子教訓書となれり。

⦿華族女學校大學部の延期　同校にては學則を改正し本學年より大學部を設くるの計畫ありしも宮内省中に異議起れる爲め暫く延期することに決し唯此際は高等中學科の上に位せる從來の專修科の課程を整齊することゝなれるよし。

⦿女子高等師範學校　同校にては今回國語專修科を設け生徒四十名を募り明年一月より始業し一箇年半にて卒業せしむるよし。

⦿秋季盆石大會　今春大河内子爵發起となり盆石會なるものを設立せしが日を逐ふて盛大に赴き來月上旬丹羽、板倉兩子爵夫人、益田夫人、鈴木鶴子等の各婦人相會し上野美術館に於て秋季盆石大會を開く筈なり。

⦿三輪花影子　伊豫松山の松山女學校は創立以來一種の特色を存し、前后熱烈の氣慨によりて維持せられ、濃厚の同情を寄するもの尠からず。吉田淸太郎氏は久しく其の教授として、非常の盡力ありしが、一旦所思あり奮つて辭去せられし后、女學校に於て再たび之を要すること切なりしに、吉田氏歸らんか、所思を貫ぬかんか、深く困難して決せざりしに、三輪花影子身を挺して之に代り、幾多の事情を放擲して奮つて今學期より松山女學校に赴かれたり。女學校の意氣、吉田氏の熱心、三輪氏の友俠、眞とに斯界に稀有なることなり。

⦿松田道子　同女史歸朝後、夏は其鄉里に歸省中なりしが、遂に神月女學院に聘せられ、一年間其處に教授せらるゝこととなりぬ。倘ほ遊米雜感十數章起草中にて遠からず世に公にせらるべしとぞ。

⦿下田次郎氏　女子高等師範學校講師下田次郎氏は、教育學並に女子教育法研究の爲め獨英米國に滿三年間留學を命ぜられ近日出發せらる。

⦿櫻井鷗村　鷗村子出發後、ハワイ及桑港に於て撿疫の爲め二週間延引し、桑港着後は、演說、訪問、視察にて寸暇もなき由。到る處歡迎せられ太はだ感謝不禁旨報じ越されしが、去十日にはシカゴに向つて出發せり。觀光記事は遠からざるうちに揭載すべし。

⦿堺市幼稚園　堺市開口神社の歌所にて、藤本莊太郎氏園主に、下村純忠氏園長に、片岡はる子主席保姆にて、新たに幼稚園を設け、來四月よりは市立となす計畫のよし。

⦿甲府婦人會　甲府にて、横太きん、小田切浦乃、幣原たへ、齊藤とし、志村こう、進藤つる、成島なか、若尾ゑい等諸氏發起にて、近々婦人會を創設せられんとす。

⦿女子商業教育　全國商業學校長會議は去十八日に於て、女子商業教育の施設に關し審議を爲したり。

⦿テニス會　長野縣上伊那郡伊那高等小學校女生徒の發起にて去二日、テニス會の發會式を行ひたり。

⦿鹿兒島縣高等女學校　同校設立費は來年度豫算に編入せられたり。

⦿秋田婦人教會創立紀念會　去十日わざ〳〵執行せり。

⦿能登の貞婦　石川縣能登國鳳至郡南志見村小谷茂三郎養母サト篤行を以て今月中旬石川縣知事の褒賞を受く賞狀に曰く受性恭順夫に事へて貞淑業を執りて懈ることとなし明治十四年夫死亡の後纖々たる女手善く老姑を奉養し幼孤を撫育し家務百端一身之れに當りて遺す所なし二十九年より以降老姑病に罹りて久臥蓐に在り然るに溫凊の奉甘旨供一層心を竭し承歡尤も務めたり且孀居多年操履端潔凜然里閭の推重する所と爲る其事寔に奇特なりとす因て其賞として金三圓下賜候事

四宮夜靜百花香、
欲捲珠簾春恨長、
斜抱雲和深見月、
朧々樹色隱昭陽。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

要目一覽

台灣貞女の龜鑑　台灣日報（八月廿二日）
紫姫品性論（星川清成　日本主義（第二十八號）
日本主義と家庭　同　前
子守學校教科書　子守いろは歌　教育實驗界（第四卷第九號）
女子の體育（ベルッ氏述）同　前
內外兒童身體發育比較表、遊戯及玩具の心理的研究。兒童の恐怖及善惡に關する研究　兒童研究（第　卷、第一號）
女子教育改善の一端（成瀨仁藏）學窓餘談（第三卷、第二號）
露國虛無黨と婦人の權利（山田豐彥）うらにしき（第八十二號）
老婆心　中井履軒先生遺著）同　前
日本女子體格圖、女子の體育（ベルッ氏）教育實驗界（第四卷第四號）
傳燈の佛教の立脚地より觀たる婦人の位置　高野教報（第二十三號）
男子と女子の相違（レッキー氏說）福音新報（九月十三日分）
廢娼の論點（栃木縣の失態）毎日新聞（九月十九日）
山月高（婦人論評、岡崎老猿）東京日々新聞（九月十四日、十九日）
婦人體育論（續）千代田日報（九月七日以下）
洋妾（ラシャメン）の歷史等　時事新報（九月十七日）
令孃鑑（戶澤敬子）九月十一日分と千代田日報
坤德（富永冬樹氏逸話）東京朝日新聞（九月二十日）
御殿女中と古今變遷　女中班列）千代田日報（九月二十一日、廿三日）
松本荻江女史　下田歌子記）毎日新聞（九月二十一日）
夫人の素顏（山本さき子）報知新聞（九月十日以后）
琴香女史を悼ふ（耕雲山人）京濱新聞（九月七日）
學生の宿處（貴婦人方の盡力を望む）千代田日報　九月廿三日）
星まつ子（亨氏の母）人民（九月八日）
河津かく女　西山しげ女　富士新聞（九月八日　十六日）
新橋六百嬌　人民（連載中）
絕望の自殺、國家　不祥　娼妓は奴隸なり）毎日新聞（九月十一日）
新美人譜　讀賣新聞（九月十一日）
茶ばなし（大養、志賀　望月小太郎、星松三郎、天野為之、尾崎行雄、三宅雪嶺等の夫人）讀賣新聞（九月七日）

エフ、エチ、バーネット女史著

小公子

上製美本石版術譜　十數葉入全一冊定價金一圓廿五錢郵税十錢並製クロース表紙美本定價金七十五錢郵税八錢

LITTLE LORD FAUNTLEROY
BY MRS F. H. BURNETT.

「バーネット」女史の筆は、流快にして眞に迫るを以て、其名泰西に鳴る、本書も亦女史の筆に成り、字々句々一として快ならざるはなく、顯悟なる小公子が、天眞爛熳にして無邪氣なる所作を、寫し得て極めて妙なり、英文學研究に最も適切なるの書なれば、師範學校、中學校、女學校等の教科書として最適當の良書なり、

發行所
東京神田區雉子町廿二番地　岡崎屋
東京神田區表神保町二番地　中西屋

女學雜誌社出版書目

嚴本善治著　再版　海舟餘波　正價金三十錢　郵稅金四錢
嚴本善治著　吾黨の女子教育　正價金十錢　郵稅金二錢
嚴本善治著　公娼可滅　正價金三錢　郵稅金二錢
島田三郎、植木枝盛二君合著　廢娼演說　正價金三錢　郵稅金二錢
櫻井成明君譯　腓立比物語　正價金二十八錢　郵稅金六錢
横山雅男君著　婚姻論　正價金十二錢　郵稅金四錢

再版

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本　紙數三百五十頁　正價金三十五錢　郵稅八錢

●今や原書の和製成れり。相列べて讀れなば、
●亦た英文獨學の余師たらん

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作人を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや。少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、嘗て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は插畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館
大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY